

ワーグナー(1813-83)が二十数年を費やした《ニーベルングの指環》は、光と闇、善と悪、愛と憎しみなど、ありとあらゆるドラマティックな要素を内包・昇華した、オペラ史上、空前の大作。公演の前半では、《指環》のなかから選りすぐりの名場面をお届けする。

楽劇《ラインの黄金》より「ヴァルハラ」

世界支配を可能にする黄金の指環をアルベリヒから奪ったあと、いったんそれを手放した主神ヴォータンは、巨人たちに作らせた新しい城ヴァルハラへ。虹の橋を渡って他の神々とともに入場していく場面の、意気揚々たる輝かしい音楽である。

楽劇《ラインの黄金》より「起きなさい、ヴォータン」

前曲の場面より時は遡り、完成したヴァルハラを喜びながらウトウトしているヴォータンを起こす妻フリッカ。彼は築城の報酬として、巨人たちに妻の妹フライアを渡す約束をしていた。不安にかられるフリッカは、ヴァルハラの荘厳なモチーフが響くなか、恍惚として契約を忘れていたかのようなヴォータンをなじる。

楽劇《ワルキューレ》より「冬の嵐は過ぎ去り」

ヴォータンと人間の女性との間に生まれた双子は離れ離れに。第1幕、敵に追われるジークムントは、運命の如くジークリンデのいるフンディングの館に逃げ込み、そこで二人は運命的な再会を果たす。父の残した剣ノートゥングを見つけて高揚するジークムントは、冬を解き放つ春のような愛の歌をうたう。

楽劇《ジークフリート》より「ノートゥング、宿命の剣」

ジークムントとジークリンデの忘れ形見、ジークフリートは恐れを知らぬ青年に成長。アルベリヒの弟ミーメの家で、ヴォータンによって砕かれたノートゥングを再び剣へと鍛え上げる。鍛冶作業をしながらうたう本曲は、リズムカルで楽しく、勇壮だ。

楽劇《神々の黄昏》より「ブリュンヒルデよ、聖なる花嫁よ」

父ヴォータンによって眠らされたブリュンヒルデを、ジークフリートが目覚めさせ、二人は愛し合う。しかしアルベリヒの息子ハーゲンの策略で記憶を失ったジークフリートはハーゲンに殺される。死の間際、ブリュンヒルデのことを思い出すジークフリートの絶唱と、その音楽は壮絶かつ重厚。

楽劇《神々の黄昏》より「ジークフリートの葬送行進曲」

英雄ジークフリートの亡骸を運ぶ場面で奏でられる音楽は荘厳のひと言。「英雄の死の動機」に始まり、「ヴェルズングの英雄の動機」、「ジークリンデの動機」、「剣の動機」などを経て、クライマックスの「ジークフリートの英雄の動機」に至る。管弦楽の名曲として単独で取り上げられることも多いが、本日はブゾーニ編曲によるピアノ版で。

フォーレ＝メサジェ:パイロイトの思い出

ワーグナーが自身のオペラを上演するために建造したバイロイト祝祭劇場。フランスのフォーレ(1845-1924)とメサジェ(1853-1929)は、同劇場で聴いた《ニーベルングの指環》の印象を4手ピアノ作品に込めるべく、共作を試みた。軽快な運びのなかに《指環》の名旋律がちりばめられ、彼らがバイロイト詣でを楽しんだ様子が伝わってくる。

ワーグナー: 歌劇《タンホイザー》より「夕星の歌」

序曲をはじめ、多くの名旋律が散りばめられた《タンホイザー》。この「夕星の歌」もその一つ。タンホイザーの親友ヴォルフラムは、罪の贖いでローマ巡礼に行った恋人の帰りを待つエリーザベトを思い、敬虔な祈りの歌をうたう。

ブルックナー: 交響曲第3番《ワーグナー》より 第1楽章

ワーグナーを崇拝していたオーストリアの作曲家ブルックナー(1824-96)は1873年、ついにバイロイトで憧れの巨匠に会い、この第3交響曲を献呈させてもらうことに。しかし初演は失敗し、ブルックナーは晩年までこの交響曲を改訂し続けた。とはいえ、本作に息づく響きは、紛れもなくブルックナーのものである。